

アジ研
読書案内

—研究者が薦める3冊—

イラン研究の途上で出会った本たち

鈴木 均

私は昨年、この一〇年来の研究
成果を『現代イランの農村都市
——革命・戦争と地方社会の変容』
(勁草書房 二〇一一年)として

上梓したばかりである。それゆえ
イランの現状についてお薦めの本
といえば、取り敢えずこの本を第
一に挙げる以外にはない。

だが私は同書を執筆するにあ
たって、先行研究という意味合い
以上に意識し、また目標にもして
いた二冊の本がある。一体それら
の本の何をどう意識していたの
か、まずは開陳してみよう。そし
て三冊目に挙げるのは本来の意味
での私の愛読書である。

●徹底した個別事象への拘り

拙著の前半部分(特に第二章)
において、私はイランにおける
フィールド調査の個別的な結果を
殆ど無味乾燥と言えるほど羅列的

に叙述している。一般にデータの
解釈と抽象化は社会科学に不可欠
の要諦であるが、私はあえて問題
構制の全体像を述べるべきこの部
分で自分の叙述をその前の段階で
留めることにしたのである。

実はこの叙述の文体は、アン・
K・S・ラムトン著・岡崎正孝訳
『ペルシアの地主と農民——土地保
有と地税行政の研究』(岩波書店
一九七六年、原書はAnn K. S.
Lambton, Landlord and Peasant
in Persia: A Study of Land Tenure
and Land Revenue Administration,
Oxford University Press,
1953)を強く意識している。

訳者の岡崎正孝氏は、ある文章
の中でラムトンのこのような執筆
の姿勢をむしろ安易で性急な抽象
化・一般化を避ける学問的に厳密
な態度として評価している。確か
に互いに隣接する村や小都市にお

いてあまりにも異なる事情が併存
しているような場合、それらの事
実を列挙するかわりに中間的な記
述をすることは、事実について何
も語らないに等しいといえるだろ
う。

だがそのことにも増して、私は
まるでフィールドノートの引き写
しのような事実関係の叙述を淡々
と重ね、あえてそれに解釈や結論
を書き加えようとしないラムトン
の文体の中に、自分が直接的に知
り得た等身大の社会的事実をその
ままに定着させることを何よりも
重要視するという強固な意志、社
会科学的な抽象化・平準化と統計
的な数値化の手續きが必然的に内
包している危うさといかがわし
さ、ある種の暴力性に対する根本
的な懐疑をも読み取ったのであ
る。

しかしながら、単なる個別的な

事象の連なりが読者に何を伝え得
るだろうか、というのは大問題で
ある。そこで私としてはせめて最
低限の整理と分類を加えることに
よる自分なりの解釈と抽象化の作
業を引き受けたつもりである。そ
れは社会科学のな真実を統計的な
操作のなかにこそ見出そうとする
志向からすれば、確かにいかにも
データ加工に対する過度の逡巡と
も見られるかも知れない。だが私
が乾いた論理操作による抽象化・
数値化のかわりに読者に伝えた
かった論理は、全く別のところ
にある。

●内在的なストーリーの発見

拙著の後半にあたる第三章から
第五章では、それまで個別的な事
実に拘泥しがちだった晦渋な文章
が急に流れ始めるのを注意深い読
者は感じ取るかも知れない。この
部分の執筆に際して私が強く意識
していたのは、『イラン農民二五
年のドラマ』(日本放送出版協会、
一九九〇年)を始めとする故大野
盛雄の一連の著作である。

大野先生は私のイラン研究の大
学時代からの恩師であるが、先生
もまた徹底的にフィールドワーク
に基づいた個別的な事実の集積に

拘ると同時に、それをいかに叙述するかに常に心を砕いておられた。大野先生は常々ラムトンの前記の著作について、「無味乾燥な事実をいかに列挙してもそれは社会・文化的な事実を伝えたことにならない」として、異なる文化の社会的事実を的確に伝えるための新たな文体の創出を果敢に試みられた。

そうした試行錯誤のひとつの成果が前記の本であるが、同書の中から大野先生は長年月^{ちやうねんげつ}にわたるイラン農村の社会構造の変質を、あたかも外部から完結した書割のある舞台において農民が演じるドラマのように描きだすことに成功している。

だがひとつの農村において二〇年以上という長年月を費やし、定着型の調査結果を凝集させて一冊の本にまとめた大野先生の仕事に対し、私自身の調査はあくまでも移動型、一過性であり、ひとつの調査対象地域に対する情報という意味では到底敵^{かな}うものではない。また、そもそも全く時代背景の異なる現在のイラン地方社会において、長期的な定着型の調査を行うことがどの程度有効であるのかについても大いに検討の余地がある

だろう。

それでもなお、ある地域的な範囲における人々の生活や文化の断面を脈略のあるストーリーとして把握し、その調査結果を物語のような文体で叙述するという方法は斬新であり、私の行ったようなフィールド調査についても参考にすべき点が多いと思われるのである。

●比較の軸としての日本文化論

一般的に地域研究というのは方法的に確立しておらず、それゆえややもすれば単なる雑学の集積に過ぎないものになり勝ちであるという批判も最近では聞かれる。だが異文化研究としての地域研究は本質的に比較の学なのであり、多くの場合には研究者自らが背負っている文化を比較の基準とすることになる。

私の場合、自分が背負っている筈の文化に対する知識の浅薄さは若い頃ひとつの劣等感のようになつていった。そこで私は日本について持続的に考察するひとつの方便として、『共同幻想論』（河出書房新社、一九六八年、角川文庫など）以下の吉本隆明の著作を学生

時代から現在まで読み継いできた。吉本の著作はおよそ一〇〇冊以上にものぼり、その全体像を把握するだけでも容易なものではない。

だが長年吉本という絶対的に超えがたい著述家の作品群に挑んでいる中で、最近になって彼の思索の中にあるアキレス腱のような弱点を発見した気がした。それはたまたま『ダーウインを超えて』（朝日出版社、一九七八年）という今西錦司との対談集（というよりはむしろ吉本による今西への思想的インタビュー）を読んでいた中でのことだが、私は吉本隆明という思想家はやはり近代科学の進歩というものを過度に絶対化しているのではないかと強く感じたのである。

またそれには吉本の生年が一九二四年という年であったという時代背景も深く関わっているように思われた。彼の学生時代における日本の物理学や化学の水準は世界でも正にトップレベルを行くものであり、自身が理科系の東京工業大学電気化学科に進学している。そのことの孕む問題性は後年の原発反対運動批判にまで陰に陽に繋がっているのである。

いずれにしても一生取り組むに値する文筆家を選び、その全著作を長年月掛けて読み進んでいくことは、地域研究者として異文化に接する際の比較の基準をより確固たるものにするための、ひとつの有効な方法であると言えるだろう。その場合、それは自分の研究のための方便という段階から、いつの間にか人生の伴侶ともいうべき存在になつてしまうことも少なくないのではないだろうか。

（すずき ひとし／アジア経済研究所 地域研究センター「イランおよびアフガニスタンの地域研究」）

※この文章の脱稿後、三月一六日に新聞報道によつて吉本隆明氏の訃報に接した。この場をお借りして吉本氏のご冥福を衷心よりお祈りする次第である。